虎 鶇 の 古 名 ・ 方 言

(II)

Old and trival names of the Japanese Ground-Thrush and it's allies

梶 山 徳 太 郎

Toku T. Momiyama

[E] 棲息地の環境を現わしたもの

ミヤマツグミ (鳥取県下・島根県^{カノアシ}鹿足郡・福岡県筑前地方)

ミヤマツグミ (栃木県塩谷郡栗山村・上都賀郡今市町・群馬県下・鳥取県^{アカサキ}東伯郡赤碕町)

ミヤマジナイ (愛媛・熊本両県下)

タケシンナイ (長野県松本地方)

ヤマツムギ (滋賀県下)

ヤマウズラ (山形県村山地方)

ヤツツグシ (鹿児島県下)

ヤツクシ (鹿児島県下)

ヤジツクミ (鹿児島県下)

ヤジロ (鹿児島県下)

ヤジツグ (秋田県仙北郡)

ヤブキジ (宮崎県東諸県郡本庄町及び綾町)

ヤネキジ (福岡県田川郡彦山村・大分県^{シモケ}下毛郡^{ツキノキ}槻木村)

サロシギ (伊豆七島大島差木地村)

カワラバト (長野県西筑摩郡木曽地方)

“ミヤマツグミ” “ミヤマツグ” “ミヤマジナイ” “タケシンナイ” 等は

奥山或は岳に産することを言現して居り、つまり稀有であるとの意味であろう。“ヤマツムギ”“ヤマウズラ”は山棲の意であり、殊に後者は其れが美味なことを含めておるかも知れない。

“ヤツツグシ”以下の「ヤツ」は谷を意味し、“ヤジツクミ”以下の「ヤジ」は谷地を冠して居るが、此の谷地は沢・沼沢・草叢等の意で、アイヌ語では沼沢地を指す。

“ヤネキジ”の「ヤネ」は藪の事であるから、前出の“ヤブキジ”と同意味である。

“サワシギ”，これは谷間などに見るからで、伊豆大島の谷間には殆んど水の無い空谷で，“シギ”は山鳴の事である。此のような環境の所にはヤマシギはすまない。該種はモット日当りの好い雑木山か稗畑に居る。

“カワラバト”，山間の河原などを歩いて居て人を見掛けるとパッと飛立つ処は丁度キジバトのようだ。

[F] 食性より導来されたもの

この種には本項に該当するものがない。

[G] 鳴声・食性以外の習性から導来したもの

ハイツグミ (広島県佐伯郡)

クネツグミ (山形県東田川郡余目町)

“ハイツグミ”は少しも飛ばずに、頸を縮めて一気に地上を一直線にツツーッと馳せ行く処は這うと云う形容に相応しい。

“クネツグミ”，これも能く畦に添つて走り歩いて居る。

[H] 季節を讀込んだもの

この種には本項に適合する方言がない。

[I] 出現の状態を讀込んだもの

a. 時刻を讀込んだ場合

ヨドリ (奈良県高市郡)

ヒルシギ (伊豆七島八丈島大賀郷村)*

シルシギ (伊豆七島八丈島大賀郷村——稀に)*

“ヨドリ”は勿論夜鳥であろう。あの不気味な鳴声は主に夜間に聞えるから。

“ヒルシギ”のシギは山鳴のことで、該種が主に未明や薄暮に徘徊するのに対して、此の鳥の方は昼間でも見る事が出来るから斯様に云う。“シルシギ”は其の訛音である。

b. 気象を誂込んだ場合

ユキチ^{ネジョ}ォマ (八^{タテ}戸市根城・青森県三^{コリカワ}戸郡館村・是川村・島守村並びに階^{ハシ}上村, 岩手県九戸郡及び紫波郡)

ユキチ^{ガミ}ォマ (岩手県下)

ユキチ^{ガミ}ォ (岩手県上閉伊郡)

ユキケシドリコ (秋田県?)

雪が降るようになると里に見られるので, “ユキチ^{ガミ}ォマ”とか, “ユキチ^{ガミ}ォ”と云われる。後者は前者の略語であるか, 其れとも雪鳥の方であるかも知れない。

南の方へ寒さを避けた此の種がやがて東北地方に戻って来る頃になると, 積った雪も殆ど消える頃ともなるので, 雪消鳥コとも云われて居る。

[I] 地名から名付けられたもの

ミハラゴッコ (伊豆七島八丈島三根村・大賀郷村・樫立村並びに中之郷村)*
“ミハラゴッコ”のミハラとは, 八丈島の東側に聳える三原山 (一名東山) の名を冠し, それに伊豆七島特産のアカコッコの方言コッコを添えたものである。実際に此の鳥は八丈富士 (一名西山) の方より三原山側の方に多産するようだ。因に此の鳥の学名 *miharagokko* は此の地の方言を其の儘に採用した訳だ。

[K] 伝説より導来したもの

本項には説明の補いとして漢字を加えた。

ヨミジドリ〔黄泉鳥〕〔拾芥抄〕——異種同名あり。

ヨミツトリ (『袋草紙』『八雲御抄』)

メイドノトリ〔冥途鳥〕(岐阜県^{ヨシキ}古城郡^{カミダカラ}上宝村)

デゴクトリ〔地獄鳥〕(静岡県駿東郡須走村)——異種同名あり。

デゴクトリ (静岡県駿東郡須走村)

ツゴクトリ (山形県東村山郡^{サクヤサワ}豊田村及び作谷沢村・西置賜郡南小国村朝日
鉱泉)

ツゴクトリコ (秋田県仙北郡(?))・山形県村山地方)

タマスドリ〔魂鳥〕(秋田県由利郡^{キサカダ}象潟町及び上浜町)

シビトヨバリ〔死人呼ばり〕(福島県東白河郡^{カミハマ}鮫川村)

ムジョオドリ〔無常鳥〕(福岡県田川郡彦山村)

シンジュウドリ〔心中鳥〕(岐阜県古城郡上宝村)

ウレイドリ〔憂い鳥〕(長野県下伊那郡)

アイナキドリ〔相鳴鳥〕(長野県東筑摩郡波多村・南安曇郡安曇村)

ガンドリ〔棺鳥〕(秋田県仙北郡角館町下河原)

ガンヒョオ (秋田県仙北郡雲沢村下延)

ダミドリ〔茶毘鳥〕(青森県東津軽郡田代温泉)

シツクシ〔死鷄?〕(鹿児島県下)

ガシトリ〔餓死鳥〕(福島県^{ウツシ}田村郡^{イマダテ}移村^{アヲヌベ})

ヒドリ〔火鳥〕(福井県今立郡栗田部町)

特殊のもの以外は各々に就て説明を為さないで総括的の解釈を与える。

「袋草紙曰、鷄鳴時哥。ヨミツトリワガカキモトニナキツナリ人ミナキキノ
ユクタマモアラシ。」このように昔から此の鳥が鳴くと、人が死んで其の魂
は黄泉に行くと云われて来た。(多くの場合ではスエドリ或はスエコドリで
詠って居るが、前出の様にヨミツトリでの詠草もある)。即ち此の鳥の鳴声
に連れられて行く先を冠詞にして、黄泉鳥、冥途鳥、地獄鳥もあり、呼ばれ
て行く其の者の魂鳥もあり、又其の行為を称して死人呼ばりと云うのもあ
る。

九州の英彦山では「この鳥は朝方と夕刻とに時間を定めて鳴く」とも、又
「夜明と正午とに鳴く」とも云い、「朝鳴く時は若者が死し、夕方鳴くと老人
が死する」などとも云う。そして此の地では無常鳥と称する。 (『英彦山の鳥』

に依る)。

飛騨の吉城郡上宝村では、この鳥が鳴くと必ず心中があると云って、心中鳥と呼んで居る。

日本アルプスの登山口である東筑摩郡波多村あたりでは、二羽で鳴交わす時は人が死ぬと云って、此の鳥を相鳴鳥と云う。(他の伝説もある)

秋田県角館町下川原部落では、此の鳥を棺鳥と称して居て、その鳥の背に棺の形をした部分あるからだと云う。又 この鳥が鳴くと必ず不吉な 事があり、雨も降ると云う。〔羽後角館地方に於ける鳥虫草木の民俗学的資料〕に依る)。

“ガンヒョォ”に関しては A 項の b に既出してあるから重複を省く。

茶毘鳥に関しては少しも識る処がない。併し茶毘なる語は、余り目出度い言葉でもないから何か不吉な伝説を伴って居ると信ずる。

鹿児島県下には色々の語彙があるから“シツクシ”と云う言葉が果して死鷄に当って居るか如何かは筆者にはわからない。正しい意味を御熟知の諸賢は御垂教頂きたい。死鷄そのものが正しかったら、それに関する伝説を御示教ありたく思う。

餓死鳥とは、此の鳥が多く鳴く年は凶作、即ち米が不作、それを此の地方では餓死年と云う。従って其の原因を作る(?)鳥は“ガシドリ”と云うことになる。(湯淺大多郎博士示教)。

「この鳥は夜になると家々の煙突の中を出入して火をくわえて飛んでいる。そして気まぐれに何処の家でも火を放って行くのだ。——というのである。」これが火鳥の名の起りだと云う。(林武雄：トラツグミの方言について、「日本野鳥の会福井支部報」, no. 3, 1952)。

[L] 語源不明のもの

ソラツクミ (鹿児島県下)

ソラツグシ (鹿児島県下)

ショオト (?) (愛媛県東宇和郡狩江村)

イヨマ (和歌山県西牟婁郡田辺地方)

キャアシ (入吉市大畑)

ヒキウン (新潟県北蒲原郡赤谷村)